
天国からの贈り物 ~不思議なマッチ~

黒土 計

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天国からの贈り物 ～不思議なマッチ～

【Zコード】

Z2314D

【作者名】

黒土 計

【あらすじ】

アンテナ工場をクビになり今後の生活を考えると家にも帰れなくなつて途方にくれたエド。と、そこに行方不明のままだつた親友のダニーが！？酒場で酒を酌み交わし、全てをぶちまけるエドに親友ダニーがくれたのは不思議なマッチ。点火した炎に向かつて願い事をすると夢か幻か！？本当に願いが叶うつていう物だつた！願い事が叶うマッチでエドは幸せになれるのか？マッチをくれたダニーとの約束は最後まで無事に果たせるのか？笑いあり？サスペンスあり！？涙ありの物語です。

プロローグ

アンテナ工場をクビになり今後の生活を考えると家にも帰れなくなつて途方にくれたエド。

と、そこに行方不明のままだつた親友のダニーが！？酒場で酒を酌み交わし、全てをぶちまけるエドに

親友ダニーがくれたのは不思議なマッチ。

点火した炎に向かつて願い事をすると
夢か幻か！？本当に願いが叶うつていう物だつた！

願い事が叶うマッチでエドは幸せになれるのか？
マッチをくれたダニーとの約束は最後まで無事に果たせるのか？

笑いあり？サスペンスあり！？涙ありの物語です。

第1章・1 ダニーとの再会

「はあ～これから
どうすればイイのか・・・」

エドは深い溜め息をついた。

働いていたアンテナ工場が機械化で、人材がいらなくなり突然クビになつたのだ。

「クビになつたって、オリビアに言つたら・・・

あ～どうすれば良いんだ～！」

恐妻の怒り狂う光景を思い浮かべて、エドは家に帰るのが怖くなつた。

「あ・・・雨」

「エドは・・・どうだ？」

どのくらい時間が経つたのだろうか。もう夜も更けていた。

足が向く方へ彷徨い歩いた事も思い出せない。
雨はどんどん激しくなつたけど雨宿りする気力もエドは失つていた。

雨に打たれながら階段に座り込みただつむいていたその時だつた！

「エド？エドじゃねえか～！？」

「やあ・・・ダーダー・・・」

「ダーダー！？驚いてエドは我に戻った！

「ダーダー…エドに行っていたんだ…！みんな心配したんだぞ…」

「悪い悪い…ちよつとな…」

「ちよつとじやな…どれだけみんな心配したと思つてるんだ…」

「まあエド怒るなよ…」

「え～？ 1週間もどこに行つてたんだ！ 探したんだぞ！
工場が終わつて疲れてるのにさあ！俺は…」

ふと気が付いたらエドはダーダーと肩を抱かれ導かれるよつと歩いていた。

エドは暗くて何も見えなかつたけど、

電灯もない真つ暗な路地をまるで猫のよつにスルリスルリ。

ぼんやりとオレンジ色の明かりがともるドアが遠くに見えた。

「あそこに行こう」

「ちよつと待つてくれ！俺お金なーじ」

「ハイハイとよー今夜は俺のおーじだ」

お、じつてお前・・・。

ダーは扉を開いた。

第1章・2 親友ダー

薄暗い小さな酒場。誰一人客はいなかつた。

「おひー！マスター！俺の親友なんだ」

「ダニー？知り合いなの？へエ～何か以外だな～」

マスターと呼ばれる男は、ただペコリと頭を下げた。アンテナ工場の給料は安用給。酒場どころか家でさえ酒なんてもう何年も飲んでいない。

「さあ！再会を祝つて乾杯だ！」

気が付くと自分の前にお酒が入ったグラスが置かれていた。

いつのまに・・・・？マスターは同じ場所に立つていた。初めて来て浮かれて気付かなかつただけさ。エドはダニーと再会に祝杯をした。

ダニーとは生まれた時からまるで兄弟のように子供の頃から何をするにもずっと一緒にいた。隣同士の家はお互に貧乏一文無し！

雨が降れば雨漏りのないダニーの家に2家族集まつて眠り家の中にある桶の水さえ凍つてしまつ夜は隙間風の少ないエドの家に。本当に仲が良くてお互い助け合つて生きてきた。

「「」の～キノ」は～食べるーつて、じつちあんちつたくせに食べべ

たらみんな食中毒ね！」しゃべる

「あの時さあーうちの親父ー寝ぼけてその場で小便してやー！俺なんか顔にかかるんだぜ？」

「ばあちゃんなんか、死ぬまでダーダーと俺の名前呼び間違えてたし」

「やうだーお前ーばあちゃんの葬儀の日」

「イイドー覚えてるわ」

「あんなデッケ屁をこじねー」

「空かやつ思つたつて言つてんじやんーー！」

本当にあの頃は楽しかった。貧乏でも毎日が樂しくってしょうがなかつた。Hではダーダーの事を本当によつに愛していた。そう。あの日までや・・・。

第1章・3 イザベラへの恋心

ダニーはエドよりも一つ年上。

一つしか年が変わらないのに「お兄～ちゃんなんだから…」といつ理由で

ステラおばさんにダニーは怒られいつも我慢してきた。

ケンカをしても最初に謝りりんごが一つ残ればエドに。見ていた本をエドが欲しがればエドに。全て一つ年上だというだけで我慢した。でも一つだけダニーは譲らなかつた。それは彼の妻イザベラ。

エドはイザベラの事が好きだつた。決して美人じゃないけれど優しくつて女の子らしくつて。もしイザベラと・・・と色々な事を考えて何度甘い夢を見たことか。だがイザベラ本人を目の前にすると意地悪をしてしまう。

仲直りしようと「ゴメンネ」の言葉が口から出る前にいつもダニーがやつて来て、泣いてしまったイザベラをなだめた。ダニーの手が彼女の髪を撫でる。それだけでもエドの心は七転八倒していたのにある日ダニーは彼女の肩を抱き寄せ頬と頬を寄せた。抵抗もせずに身を預けるイザベラ。確実に2人の距離が急接近している…止めなくては…!! 今すぐ止めないと…エドの存在を無視して抱き合つ2人の間を強引に押し引き離した。

判りきつていた事だつた。

「ダニーの事が好き・・・」

「僕もだよイザベラ」

プライドを捨て意を決して玉砕したうえに強制的に2人の愛の言葉を聞き届ける牧師役にされたエド。憎まれ口を叩かずにはいられなかつた。が！ 何も思い浮かばない！ ダニーがこっちを見た！ 何か言わなければ！ と思わず口から出た言葉は、物マネしまくつたステラおばさんの

「ダニーはお兄～ちゃんでしょ！？」

こんな時に限つて「ヒ」の伸び具合など最高に似ていた。きっとこの状況じゃなかつたら2人も笑つてくれたであろう。茶化しになつてしまつたエドに威風堂々とダニーは答えた。

「エド？ イザベラは譲らないよ。心から愛しているんだ」

もし俺が女だつたら間違いなくダニーの胸に飛び込んだであろう。恋の勝ち負けはもう問題じゃない。とにかく幼稚な自分が恥ずかしい・・・早く立ち去りたい。でもこのまま立ち去つたんじゃつかつこ悪すぎる。

でも何も思いつかなかつた。涙だけは見せたくない！ 逃げたい心がそうさせたのか？ くるつとターンをしてポケットの中に手を突つ込み歩いた。

用事を思い出したフリをしよう！ 逃げたと思われるのがイヤで、そつ自分に言い聞かせた。本気としたの？ 冗談に決つてるだろ？ つて

明日言えれば・・・そつせーー[冗談]・・・。ウツ・・・泣くなー。エーーー。や
前の未来は明るいぞー? そうだー。口笛でも吹いて、楽しくなつてき
ただろー。

シュー・シューと息の方が大きな音も出ない口笛を吹きながらツマズいた。慌てて出そうとした手はポケットだけを破り去りエドの体を助けてくれる事はなく鼻血を垂らすエドのハンカチとなつた。2人以外には知られていない今でも思い出したくない最悪な失恋だつた。

それから程なくダニーとイザベラは結婚した。人生最大の恥をかいたエドは、あの日以来2人と顔を合わせる事も出来なかつた。

ダニーが仕事に行く時間に会わない様に。イザベラが洗濯を干す際に会わない様に。まるでネズミが猫に見つからないように陰に隠れて生活をした。

ダニーの家から聞こえるイザベラの笑い声がエドの溜め息で家の空気をさらに重くした。

そんなエドを見かねて父と母が、隣町から1人の女性を連れてきた。

名前はオリビア。母方の兄弟の嫁のそのまた兄弟の婿の兄の嫁の・

・ まだまだ続くがエドも正確に覚えてない。親戚関係とは遠すぎて他人の方が近い。

「何て美しいんだ・・・」

エドは一目見てオリビアの事が好きになつた。イザベラと違つて大きな瞳。

髪はブロンド? 肌も雪のように白くエドと目が合つ度にピンクに染まつていく頬!

何て愛らしいんだ~

すぐさまエドはオリビアと結婚した。人に見せびらかしたいほど美しい妻。控えめで器量も良く家事も料理も完璧! もう昼夜問わず

エドはオリビアに首つ丈一あつという間に可愛い女の子まで授かつたのだった。

美しい妻と可愛い子供の存在のおかげで恥も忘れて一気に社交的に変わったエド。何もかもがバラ色に見え感も冴え渡った。

「あいつには一目置いていたんだ」

エドが開発したアンテナのおかげで工場は活気に満ち溢れ、従業員の給料も2倍?いや3倍と上がり町中の男達もエドを絶賛した。仕事も順調。新しい商品の開発から販売まで。全てにおいて常にパート!

「近いうちに何もかもが機械化され、人材はいらなくなってしまう。だが、社長と言つのは口で働く従業員だけではなく、その家族全ての生活を任せているんじや。お前ならきっとできる!ワシが死んだら是非お前に・・・とアンテナ工場の社長が機械化を推奨する嫁婿カーターの存在よりもエドを後継にと懇願した。

「エドったら本当に素敵ね~」

町中の女達もエドを憧れの男として見るよくなつていた。

「ワタシ将来エドのお嫁さんになるの」と幼子から。

「私がもう少し若かつたら恋に落ちていたんだけどね~」といつおばあちゃんの言葉にまで「今でも十分美しいですよ。今夜君をさらつて遠くに行きたいほどさ!」と口から次々に愛のメロディーを奏

でた。 そんな町中の人々を虜にする工場に最後の日が訪れる。

第1章・5 美しい妻から恐妻へ

アニーはエドが働くアンテナ工場に勤めていた。別に愛していた訳ではない。人気者のエドの恋仲の1人であった。エドの気分で2人は情事に溺れた。エドはそれ以上の関係は望んでいなかつたがアニーは他の女の存在よりも何よりもエドが愛するオリビアの存在が気に入らなかつた。

「オリビアをえいなくなれば……」

自分の誕生日の夜に会えない淋しさからアニーは町中のみんなにエドとの情事さらにある事ない事を付け足してぶちまたた。

噂はすぐに広がつた。が！「俺もエドみたいになりたいね～」男達はうりやむだけ。「私も抱かれたいわ～」と女達。アニーの望む用には行かなかつた。

エドが町中のみんなに避難をされ、オリビアも去つて行き私だけが彼を・・・。きっとエドに愛想をつかされたのは私は話してしまつた事への後悔をしていると。

トントン。

トントントン。

誰かがアニーの部屋のドアをノックする。

「誰？」

トントン。

「Hド?」

「Hドかもしれない！嫌われてもいい。今アナタに会えるなら・・・。と甘い期待は飛んだ。

「オリビアと言います。アーネさんですか？」

町中に広がった噂はオリビアの耳にも入った。いつもの美しい妻の顔が、悪魔に取り付かれたような恐ろしい形相を見て、Hドは必死に取り繕うとした。

「本當にっ！」

「本當やー。2度と他の女になんか目もくれない！僕が愛するのはオリビア君とリサだけやー。」

可愛い我子リサとオリビアをえこれば、もう何もいらないー。」の命投げ出してもイイ！いつものように滑らかな饒舌でオリビアへ愛の言葉を投げまくり抱き寄せた。

「Hド。私も愛しているわ。私とリサをえいれば、何もいらないのね？」

「やつやー。本當だよ」オリビアはHドの胸を突きはねた。

「でも信じられない・・・。」

「本當だよ！もし君が望むなら僕はこの2本の足だっていいらない！」

「この足もいらないのね？」

「こんな足いるもんか！ どんなに君が変わってしまおうが僕は絶対に君だけを愛し続けるよ」

「本当ね？」

「本當さん」

「じゃあ、田をつぶつて？」

あ
い
い
よ。
判
つ
た。
何
を
す
る
ん
だ
い
?

「なくしてしまつのよ」
一瞬の出来事だった。

オリビアは煮え繰り返つた鍋の湯をエドの股間にぶちまけた。

足はなくならなかつたもののエドは男としての機能を失つた。自分の裏切りから出た災難とは言え、以前のように心からオリビアを愛する事はできなかつたが、

次は何をされるか！－考えただけでも恐ろしくなりオリビアの「機嫌だけを伺いながらの生活になつた。

アニーは?と言つと本当の所は誰も判らなかつた。最後に部屋を訪

れたのはオリビアとまで判つてゐるのに。自殺と言つには、あまりにも不可思議な所が多かつたが身寄りのない娘の事等、小さな町としては早く消し去りたい事だったのだろう。

「次は私かもしれない！？」

何をしでかすか判らないという恐怖からオリビアが閑つてゐる…と判つても誰も口にする物はいなかつた。

この一件でエドの創作溢れる才能も停止。新しい商品の開発もなく売り上げは落ち仕事も低迷。じいちゃんに続きばあちゃんまで事件から逃れるように息を引き取り活気に溢れる男達の声も。子供たちの幸せな笑い声もエドの家だけではなく街から消え去つた。

「あの頃は良かつたよな・・・」思わず涙がこぼれ出た。

前社長の思いを捨てて、亡き後の工場を継いだ嫁婿のカーテーは全ての作業を機械化した。そのおかげで人材が必要なくなり工場に働いていたほとんどの人たちをクビにしたのだった。最初は老人達。次に女達。そして遂に男達まで。話は消えてしまったが、前社長から

「ワシの次はお前に継いでもらいたい！」という思い入れがあつた為か特にエドに対してカーテーは何かと目の仇にした。

「いんな工場やめてやるー！」何度も声に出したかったことが。

でも、ココ以外に働く場所はどこにもなかつた。アンテナ工場だけではない。全ての仕事が機械化され人材が要らなかつたのだ。僅かな給料でバカ扱いされながらエドは必死に働いた。だが、とうとうエドにもその日が來た。

「クビだ」今日までの給料を渡され、追い出されてしまった。

「昔は鳥もいたよな・・・」エドの愚痴ばかり聞いていたダニーが口を開いた。

「鳥？鳥の話なんかしてねえよ！」何杯飲み干しただろうか・・・。飲み干しても気付くとそこには満タンに継がれたグラスがあった。

工場が機械化され、「カウカウ」と吐き出される黒い煙。ドロドロと流

される汚水に街の景色は一変した。鳥は消え、魚はいなくなり木は枯れ果実は変形。原因は不明だが、奇妙な病まで。街の学者が「全ての原因是機械化にあり！」と叫んでいたが実の所は不明なまま暗殺された。

草木やそれよりも何よりも変わったのが人間だった。次は俺の番か？クビになる恐怖心から媚びたり、人を陥れたり、上下関係をはつきりさせて暴力でねじ伏せ自分の恐怖へのストレスを満たす。こんな酷い事は前社長の時にはなかつた。

第1章・7 星を見せたいんだ

「ジョージとリサに星を見せたいんだ」

ダニーがまたポツリ口を開いた。ダニーの1人息子ジョージはエドの娘リサよりも1つ年上だった。

「リサが男の子だったらな！昔のオレ達みたいだつたかもしれないな。女の子って小さな頃から男同士とは違うよな。まだ7歳のくせに最近なんかは色気つていうの？妙にジョージの事を意識しちゃつてさ！・・・・・・・・星はもつ見れないだろうな」

機械化された工場が出す煙は町中全体を覆つた。新しくできた街の条例により午前8時～15時までの時間は工場の業務は停止する。この間だけが街の住人が外出できる時間なのだ。

この時間だけは工場のチリも煙も見た目には影響はなかつたが、マスクをしていても体が弱い子供や老人は何故か呼吸困難で倒れてしまう。その時間以外の外出は厳重に防護マスクをはめる。モクモクと立ち上がる黒い煙に覆われた上空からは雪のようにチリが降り、次の朝には全てが灰色に変わっている。

ジョージとリサは憶えているだろうか。

「ジョージは憶えてないの？」

「憶えてないな。星の王子様を読んで星の意味が判らなかつたようだ」

「そつか・・・。」

昔2人で流れ星を探したつて。ビュンビュン落ちる星に

「願い事言つたぜ!」

「落ちるまで二三回言えなきゃ叶わないんだぜー。」

「言つたよー。」

「嘘だね!」

何度もつまらない事でケンカしたな。エドはダーーと星を見たくなつた。

「なあ。星見に行こつか」

「絶対に見えねえよ。」

「だよな・・・」当たり前に思つていた事が、不可能になつた事に気がつき少し淋しさを感じた。

「エド・・・。イザベラは元氣か?」

「やつだよーお前じに行つてたんだー?」

自分の事ばかりで忘れて、ダーーの事を思い出したエドは声を荒げた
が時が止まつたかのように寂黙なダーーの横顔を見て消沈した。

「泣いてたよ。判りなこつて」

「やうか

「もしかしたら死んでるんじゃないかっしゃ。夜もずっと探してたぜ」ダニーは何も言わなかつた。

「でも、イザベラの事だから怒りはしないつて。オリビアだつたら俺殺されそだけど」さあ、帰るわ。心配して待つてるんだ安心れせりやうぜ

「お前帰れるのか?」

「帰れるつて何がよ?」

「クビになつたつて知つたらどうなるのかつて事だよ」ハドは立ち上がりとしたイスに沈んでいった。

第1章・8 ダーとの約束

「昔のようないて町中のみんなが幸せに戻れたらな・・・」

「やうだな

「全てが機械化なんて。牛が可愛そうだよなーあんな機械で乳搾られてよ。牛って言つのは人間と同じで声かけてその牛に会わせて絞つてやんないとよー」

「やうだな

「機械じゃなくつて人間が手で作れば、あの煙だつてチリだつてなくなるんだぜ?・やうすれば、また星だつてよー」

「見えるのか?」

「やうよー見えるともー」

「本当か?」

「それだけじゃないぜ?あの煙とチリをえなくなればまた野菜だって作れるんだぜ?・ゲホゲホ咳だつて治るんだぜ?」

「どうしてだ?」

「ダニー。よく考えてみろ?全てあの煙とチリのせいでなくなつたんだり?あの煙とチリをえなくせ?」

「昔に戻れるって事か？」

「そりやー。そろすれば人も必要。仕事がなくなる心配もない訳さ。」

「そりか・・・星が見えるのか」

「いや。ダニー？星なんてどうでもいいだろ。町中のみんなが幸せに暮せるんだぜ。」

「約束したんだ。ジョージに星を見せるって」

チリリリーン・・・。何処からともなく鈴の音が響いた。ふと気がつくとマスターの姿は消えていた。

「エド。頼みがある」

グラスを両手で抱えうつむき田舎を閉じたダニーが語り始めた。

「何だよ？金の事は無理だぜ？それ以外の事も事に寄つては・・・」

エドの言葉を最後まで聞かずに淡淡とダニーは話し始めた。

「本当にジラージに渡そつと思つたんだ」

「何を？」

「でも、会えない。」

「何で？」

「今から言ひ事を約束して欲しい」

「会えないつて何だよ？帰れば・・・」

声に出したはずの言葉が・・・消えたー？ハドは不思議な感覚に一瞬驚いたがダニーの言葉に耳を傾けた。

「一つ。ジョージに墨を見せてやつてくれ

「二つ。一生イザベラとジョージが生活に困らないだけの金を渡してくれ。

「三つ。ジョージが大人になつたらリサと結婚させてやつてくれ。」

声も出ないエドはただ言われるままに頷いた。

「ハの三つの約束だけだ。後は好きに使うがいい。」

そう言つて、グラスを握つていたはずのダニーの両手からマッチ箱が現れた。

第1章・9 不思議なマッチ

「このマッチをお前に譲る。使い方は簡単だ。点火をして炎に向かつてお前の望みを唱えるだけだ。ただし、点火している間に願い事は言つんだぞ？」

嘘か幻か？でもダニーの顔から冗談には聞こえなかつた。

「望みと言つても叶わない物もある

まず一つ。死んだ人間は生き返らない。

2つ。過去に戻る事は出来ない。時間は操れないって事だ。

3つ。壊れた物は治らない。人の心も同じだ。気をつける。」

「どうしたんだ？こんな物？」

いつのまにか声が出ていた。

「本当はジョージに渡したかった」

「渡せばいい。戻ろ」

「いや。もう俺は戻れないんだ」

「何故？」

「お前は今なら戻れる」

「お前はつて何だよ?」

「俺はもう行かなきゃ行けない」

「何処にだよ?」

「いいか。お前は戻つて俺の約束を聞いてくれ。元気でな・・・愛する弟エド・・・」

「何言つてゐんだ!・・・さりぱり判らないよ?」と、ダーーの姿は消えていた。

「ダーー?冗談だろ?ダーー?ダーー!...」

ダーー?イ?イイ!?!?ゴエーゴホツ!オーニー!...ダーーと叫ぶエドの鼻の中にエドの上に積もつたチリが一気に流れ込んだ。はあ・・・死ぬ所だった。つて・・・ココは何処だ?辺りは一面薄くチリで覆われた銀の世界。モクモクと黒い煙を吐き続けるアンテナ工場の煙突が遠くに見えた。起き上がろうとした瞬間だった!

「うわ~!...!...ふう~危ない」

エドが横たわっていた場所は崖の先端だった。どうしてこんな所に・・・さつきまで俺はダーーと。夢・・・だったのか。工場をクビになり帰る事が恐ろしくなつて戻てもなく歩いていた事を思い出した。

「やうだった。俺は。」

。やうと死のうと黙つて立てやうて来たんだ。そうだ。やうと・・・

第1章・10 生と死の分かれ道

「ここから落ちたら助からないな・・・。地面に這いつぶばつてエドは崖の上から今から身を投げる場所を見渡し意を決して立ち上がり大声で叫んだ！

「神様」！「どうか生まれ変わつたら一生裕福に暮せますように！あつ！生まれた時からだぜ？一生働かなくとも良い位のお金持ちの子供になりたいです！

女にモテモテで体が一つじや足りないほどモテまくつて！それから・それから・・・えと・・うわ～！～！危ねえ

先端から安全な場所に返されるように突風に煽られた。その度に、神様に言い忘れた事はないか確認をした。今度こそは絶対に飛び降りてやる！どうせ家に帰つたつてオリビアに殺されちまうんだ！恐ろしい思いをして死んでしまうなら、自分で死んだ方がマシさ！後方に下がりいき良いよく走り出した！

「痛つててて・・・」

勢い良く走り出したダーダーだがまるで地面に飛び込んだかのようにチリに足を滑らせ、またも死ぬ事が出来なかつた。うつ伏せになつたままエドは大声で笑い始めた。

「ククククク・・・俺つて本当に不運な男だな。何て不幸な男なんだ！ア～ハハハ」

何も難しくはない。ココから飛び降りるだけだら? こんな事も失敗するなんて・・・。情けなくて涙が溢れてきた。ぬぐつた手に血が付いた。エドに何かを言いたげにその血の存在は見えた。1回目は思い出したくもない失恋記念日。鼻血を見てエドはあの日の事を思い出してまた泣き始めた。

「本当に情けないよな~あの時はポケットに二つ手を突っ込んで・・・?」とその手はポケットの中を何かを掴んでいた。

何かを掴んだままの右手に力を与えるかのように左手が包み込んだ。まさか・・・・。震える両手で少しづつ。少しづつ離れた指の隙間から1つの箱が見えた！

「夢だ！」

両手を握り返しエドはまた仰向けに倒れこんだ。とうとう頭までイカレチマツタのか？そんな訳ないだろ？あれは夢だ。そう・・・・夢。どうしてイイか判らなくなつて。何でも良いから助けて欲しくて。俺はただ逃げたかつただけで。力が入るにしたがつてエドの手に四角い物体は「」の存在をアピールした。

ギリギリ・ガツシャーン

ギリギリ・ガツシャーン

どれぐらい時が経つたのだろう。体に降り積もるチリは、小さな山を作り始めたが、エドは遠くに見えるアンテナ工場を、ただじつと見つめていた。

ギリギリ・ガツシャーン

ギリギリ・ガツシャーン

かすかに聞こえる金属音。ゴウゴウと立ち上る黒い煙。こんなに離れた場所にまで降り続ける灰色のチリ。

ザザー

積もったチリの重みに耐えかねたのか。葉が垂れてチリが落ちる音にエドは振り向いた。その光景は、木が生きる為にチリを必死に払いのけようとしているかのように見えた。

ポキッポキ

今度は別の木がエドを呼んだ。地面に降り積もったチリの影響で栄養も水分も取れず枯れた木の枝がチリの重さに耐え切れず小枝から折れた。

（お前達もこうなつていくんだよ）木の思いを聞きエドは町の方を見た。まるで生から死へ埋葬されていくかのように見える生まれ育った町を瞬き一つせずに見つめた。

「この街は死んでしまう。木も人も何もかも・・・」

夢か嘘か幻なんてもう考えなかつた。もう迷いは無い。遠くに見える煙突に視点を合わせエドはマッチ箱からマッチを一本取り出した。

シュボッ！

「アンテナ工場の機械が全部壊れますように。」

（はい。ご主人様）とでも言いたげに願いを聞き終えた炎は一本の煙となつて天高く上つていつた。

第1章・12 何かが起こうた

「やつぱつ夢か……」「Hドは意氣消沈した。待てども待てども煙は立ち上がりチリは降り積もる。

ギリギリ・ガツシャーン（本氣で唱えたぞ？）

ギリギリ・ガツシャーン（バカじやねえのか？）

アンテナ工場の機械音までもが馬鹿しているよつに聞こえた。機械音の勝利に満ちた音を背に敗北者Hドはまた歩き出した。どれぐらい歩いたのだろうか。気がついたら街の入り口まで来ていた。

「はあ……戻つてきたら意味がないじゃないか！！」

「何が意味がないのか？」

「いや……い？どうしたんだ？こんな時間に」

「何言つてゐるんだよーほらー早くお前も乗れよー」ルイスはHドを自転車に乗せて勢い良く工場に向かつて走り出した。

「おー！着いたぜ？」

猛スピードで突つ走ると舗装されたレンガ道でも舌を噛む事をHドは知つた。

「おー。待てよールイスお前もクビに」

「おはよう諸君！素晴らしい朝だね～」

「お～う～ルイス最高の朝だよ

工ドは驚いた。今まで一緒に働いてきた仲間達が工場の敷地内に溢れかえつているではないか！？一体何が起こってるんだ！？

「驚いたよな～。俺なんかこれは夢かと思つてよ～」

「ワシは今の社長に恩はないけれど、元社長に恩があるんじや

「何でも良いこ～仕事あれば。金さえ貰えれば何だつてよ～」

「ちよつと待つてくれ！ 一体何がビ～ンしたつて言つただ？」

工ドは何が起つてこのかさつぱり判らなかつた。聞こつても誰もがクビになつた同僚との再会に歓喜の声を上げ去つていつてしまふ。やつと一人の年寄りが工ドの問いかんに答えてくれた。

「何言つてるんだ？ お前の所に電話は来なかつたのか？」

遅い・・・会話が人の10倍は遅く感じる。無駄な時間を巻き返すかのよつて工ドはまくし立てた。

「いや。家には帰つてないんだ！だから頼む何がどうしてこうなつてるのか俺に教えてくれ！」

「実はな～」肝心な部分に入ると同時に、けたたましくサイレンが鳴り響き人々は朝礼台に集まり始めた。

「じやつたんだ~」

「聞こえなかつたーもひー回頼むー。」

「だからな~?何を話しておつたんじやッけ?」もひー。聞きた
い事はすぐに判る。今またに田の前に、昨日HDDをクリアした憎き
新社長カーターが朝礼台に姿を現した。

第1章・1-3 ハドの賭け

「おはよう諸君。工場の機械が壊れてしまった。修理が終わるまでの間、だけ君等にもう一度仕事をやるわ。」

金さえ手に入れば！といつ思いからか所々で喜びの声が上がったが、ハドはちつとも笑えなかつた。

「わしゃ～帰る」と、さつきの老人が声を出した。その言葉に背中を押されたのか

「前社長に恩があつて來たが今の言葉は人に物を頼む態度とは思えん！」

「俺はクビになつたんだぜ？それを今更えらやつこー助けて欲しいなら別の言い方があるだろ！…」

一瞬周囲は固まつた。賛同しようとした手を叩くとした物の妻に止められて貧困と言う現実に黙つてしまつ者。さつと同じ思いなのか。うつむき拳を握り感情を殺し必死に絶える者。再会の喜びが溢れた広場は一気に重い空氣へと変わつた。

「みんな聞いておくれ～！」

沈黙を破るハドの声にみんな顔を上げた。

「社長一つ聞きたい事がある。何で機械は壊れたんだ？」

「それが判つたら苦労しないよー突然動かなくなつたんだ。」

「煙は見えたぜ？」

「動かなくなつたつて当分の間は煙べりて出るや。」

その言葉にエドは確信した。あの願い事が本当に叶つたんだと。ただ偶然に機械が壊れただけかもしけないがエドは今なら何でも出来る!といつ自信が体中にみなぎつた。

「人手は何人いるんだ?」

「いくらでも必要だ。女も子供も赤ん坊の手も借りたいぐらいだ」

「じゃあ、ここにいる全員必要つて事だよね?」

「そうだ。機械が壊れてしまつたが明日までに商品を完成させないと」

「させないと?」

「船が到着してしまうんだよー予約でいっぱいなんだ。遅れたら工場が潰れてしまつんだ!」

その言葉を聞いてエドはヒラメイタ。

「潰れちまうのか?嘘だろ?機械に任せて売り上げは」

「違うんだ!これだけの機械を購入する為にたくさんの資金が必要

だつたんだ。

だから工場には、まだ借金しか残つていないんだ。作つて売らないと工場が潰れて」

「潰れて？」

「俺は俺の家族は暮していけないんだよ！」

広場は重苦しい雰囲気から怒りの空気へと変わつた。ただ1人エドを抜いて。全てはエドのシナリオ通りの言葉だつた。

「頼むーこのとおりだ！」

朝礼台にカーターは土下座をした。その無様な姿を見てエドは次の作戦に出た。

「おう！みんな～工場が潰れるんだつてよ！潰れてしまえばイイつて思わねえか？俺たちはクビになつたんだぜ？コイツに暮していけなくされたんだぜ？何でコイツの生活を守る為に、オレ達が動かなければならんなんだ？」

オレ達みたいにコイツも苦しむんだつてよーざまあみろつて言つもんだ！残るやつは残れ！俺はもう一度クビになるなんてよ。あんな思いをするのは真つ平ゴメンだ！残るやつに1つ言つておく。機械が治つたらまたお払い箱だぜ？今日治るかもな～いや本当は治つてたりして～」

ギリギリ・ギリギリ

天はエドに見方をしたのか？タイミング良く機械の音がした。エドは土下座をするカーターに背を向けてポケットに手を入れ鳴らない息だけの口笛をシュー・シュー吹きながら広場から歩き始めた。

「俺もゴメンだ！」

機械音がなければ着いて来なかつただろ？ 勢い良くルイスがエドの後を追つた。エドは何人ぐらい自分の後を追つたのか靴音で確かめていた。そして足を止め次のシナリオに進んだ。

「何人ぐらい残つたのかな～あの作業をね～何人でするんだろ？～死に物狂いで働きまくつてね～金をもらつ前に工場で死んじやうのか～。」

「ちょっと待つてくれ！みんな！」

新社長の慌てふためいた声に振り向いて確認しなくてもシナリオどおり進んでいる事は間違いなかつた。

「頼む…じゃあどうしたら良いのだ！」

（まだだ。落ち着けエド…。）シュー・シュー言わせながらエドは自分に言い聞かせた。

「頼む…なあ…頼むよ…」

（まだ後ろだ。ここまで来い…）

「そうだ…少し上げてやる…」

(みんな止まるなよ。進むんだ)

「頼む！助けてくれ！頼む！」新社長の声が次第に近づいてきた。

「あれ～？カーター？顔色がお悪い様でお風邪でも？」

「冗談言つてゐる場合ぢやない！なあ頼むよエドー本当に頼むー」「エドーは」の時を待つていた。

「あの時は悪かった！」

「どの時かな～あり過ぎて」

「やつその・・ほりクビにした事だ！」

「だけ？」

「それから・・・ほらーみんなの前で馬鹿にした事とか俺もさ～次期社長はお前にいつて社長がいつも言つてゐるからひとつ・・・」

「ちょっと～」

「ちよつといじやない！いっぱいだ～お前の発明で工場が栄えた恩も忘れて」

「忘れてね～」

「お前が機械の事も一番良く判つてたのにクビにした事が一番悪か

つた事だな」Hデは思わず立ち止まつた。

「それは、俺に悪かつた事じゃない」そしてまた歩き始めた。

「おお・・Hデー今は間違いだー・やつだ俺の間違いだ！いや・・・全部俺の間違いだつたんだ！・！」

まずは、殴つてやりたかつたが大きく息を吸い臉を閉じHデの前に土下座をするカーターを見下ろした。

「随分必死だね。一体クビにした俺に何をして欲しいんだ？」

「だから機械が治るまでの間もつ一度働いて欲しいんだ！この通りだ！」

俺のポケットの中には何でも願い事が叶うマッチがある。

このマッチをえあれば金だって何だって思いのままになるかもしれない。

何度も無様な思いをさせられたうえに俺は死を選ぼうとしたんだ。あのまま飛び降りて今頃は死んでいたかもしれないというのに今更カーターを許せと言う方がおかしい。

このまま工場が潰れて行くザマを見るのもイイ気味だが、もし過去に戻れるのなら俺はアノ頃の最高に楽しかった時間に戻りたい。

俺の発明で工場が栄え街も活気に満ちたあの頃に戻りたい。でも、結果カーターの為になる事だけが無性に許せない。

「頼む。頼む。助けてくれ・・・」

工場はゆっくり扉を開けた。

俺の後ろには僅かな金でもイイから家族の為、自分の為に生きる為に本当は欲しくて堪らない仲間が着いて来ている。

もう俺だけの問題ではなくなった。もう後戻りはできないんだ！そ

う決心した。

「カーター？手伝ってやつても良いけど」

「本当か！？」エドー。

「ただし条件がある」

「何だその条件って言つのはー。」

「ああ。何でしょつねー。」

条件と言つた所で正直カーターを納得させ誰もが幸せになれる方法を思いつかなかつた。

賃金を上げろーと言つたつて一日・2日程度では意味がない。
機械が治るまでの間だけ働くというのを永久にみんなが働くよう

したいというのが本音。

どうしたら、そう確約が取れるのかまではエドーにも良案が浮かばなかつた。

「賃金を上げれば良いのか？ちょっと待てよ計算してみるかー。」

そう言つて何やら紙に書き出した。

「なあカーター？」

「まず引くだろ・・・何だエドー？」

「！」の数字は何だい？

「あ～これがだな。今ある工場の借金だ。で、これが今ある全財産。で、修理代が・・・・修理代金がいくらになるか・・・」

「判らない？」

「そりなんだ。あれだけの機械が全部動かなくなつたんだ。」

「停止してしまつたシナリオの続きがエドの頭の中で完成した。

紙に書かれた金額をカーターが全て書き終える前に素早く計算してエドの条件は全員を永久に働かせる事に決つた。

「修理してもダメなら買い替えになるんじゃないのか？って事はそれを予想して修理代金ではなく購入代金に考えてみたら？」

カーターの耳元で不安の種を開花させるように言葉を撒いた。

「そんな訳ないだろ。まだ2年しか経つていないんだぞ？修理した方が安いに決つとる。」

「IJの街には機械を修理できるようなヤツはないはずだけど一体どこの街から来るんだ？」

機械は外国からやって来た代物。

隣の町だつてその隣の町だつてどこにもそんな知識をもつ者はいなかつたはず。

外国から船に乗つてやつてくるにしき一體いつ何人どれだけの費用がかかるや～。

「来たけど治らなかつたら、さうに新しい機械の購入代金が上乗せか・・・・。」

その言葉にカタカタ震えだしたカーターからペンと紙を取り上げてエドは次の作戦に出た。

「いいかい？ カーター。
君の言う通りに計算するとだなマイナスだ。

このマイナスを埋める為にアンテナを作り続けたとしても、また機械が壊れてしまつたら今よりさらに借金が増える。

ついでに書き足すと、カーターの計算の中には機械を動かす燃料費も入つてないな～」

その数字を見て頭を抱え込んだカーターをよそに、シナリオ通りの計算で出た答えをエドは優しい声で提案した。

「機械を修理せず今ココにいるみんながアンテナを作れば、給料を少し上げたつて工場の借金は消えていくんだけどな・・・。」

「本当か！」 その言葉に物凄い勢いでカーターが飛びついた。

新しい機械を購入しなくたつて、町中のみんなが。いや隣の街からだつて働き手が来るだろう。

エドはカーターだけに聞こえるように小声でささやいた。

「いいかいカーター？」

機械は壊れたら修理代金や購入代金がかかるけど、従業員が病氣になつたからつてアンタが病院の代金を払う必要があるかい？

それに、みんなが裕福になれば街は活氣を取り戻すだろ？みんなカーター君に感謝するんじゃないかな

恩人？英雄？ヒーロー？いや偉人だね

回転が遅いカーターにでも、言葉の意味を理解するまでに時間はかかるなかつた。

「そりか・・・そりだつたのか！」

エドー君は本当に素晴らしい！！

「じゃあ今日の入件費の総額はコレだ。

1人あたりこの金額にすると、ココにいる人間だけじゃ足りない事は判るよね？」

エドの計算どおりにウンウン頷くカーターはもう操り人形だつた。

「お～い！聞いておくれ！今日1日の賃金は全員この金額だ！

「ココにいるみんな以外にも金が欲しい友達や兄弟は隣町にいないか？」

庭で遊びほうけてる子供達はいないか！？子供にも平等に賃金を与えよう！

さあ、もたもたしてゐる場合じゃないぜー今すぐ人を集めんのだ！」

全員勢い良く工場の敷地から仲間を集めに出て行つた。

「ありがとうエド。本当に今まですまなかつた！」

「いや。これからですよ。明日までに作りあげる準備を・・・」

「本当にスマナカッターーー！」

男に抱きつかれて喜ぶ趣味はなかつたけど、あんなに憎らしいと思つていたカーターが泣きじゃくる姿を見て出来の悪い子を持った親の気が少しづかつた。

良く見るとカーターのハゲ上がつた頭まで可愛らしく思えてきた。

さあー男色に走る前に成功させなくてはーエドは一人工場の中に入つて行つた。

1人工場の中に入つてエドはポケットからマッチを取り出した。
もしかしたら偶然に機械が壊れただけかもしれない。本当にこのマッチのおかげなのか？

箱から一本マッチを取り出し点火した。

「機械よ動け」

願いを唱えられたマッチから一本の白い煙が、まるで生きているかのよう機械の周りを一周した時だつた。

ギリギリギリギリギリと音を立てて突然正常に作動し始めた。

あ～大変だ！もう一本マッチを取り出してすかさず点火した。

「機械よ止まれ！」

白い煙が機械に勢いよく飛び掛り機械は停止した。

「何だエド？今機械の音がしなかつたか？」

「いやカーター。ちょっと治してみようと思つたんだが、やはり無理みたいだ。」

カーターは賃金の準備が忙しいと言つて社長室に消えていった。

本当に「レはもしかして！機械化する前までは沢山の人で賑わったくもの巣だらけの食堂でマツチを点火した。

「ああ！今すぐ使えるようにキレイにしておくれ！」

部屋中に向かつて煙が立ち上がった時だつた！

ほうきが！雑巾が！テーブルもイスも鍋もフライパンだつて！まるでダンスを踊つてゐるかのように動き出し、みるみる部屋も道具もキレイになつてあつといつ間に利用者を待つ空間へと変わつた。

素晴らしい！本当に魔法のマツチだ～！さあ、こつしては居られない！次々と工場内を機械化される前の状態へと変身させて行つた。素晴らしい！本当に魔法のマツチだ～！さあ、こつしては居られない！次々と工場内を機械化される前の状態へと変身させて行つた。

い！」

褒められれば、誉めちぎられるほど男色に走りたいぐらい工ドの気分は最高潮になつた。

「さあ、まだまだやる事がたくさんあるぞ！」

工ドに全てを任せとけば大丈夫！虜になつたカーターは全てを工ドに任せると言つた。

工場の朝礼台の前には老人から赤ん坊まで！溢れんばかりに人が集まつていた。

以前働いていた人は、新しい男達に指導しながら以前の持ち場を。新しい女達には食堂でみんなの為に食事を作つてもらひ。

「今日「口」にいる全員の分を作るんだ！大変だらうがよろしく頼むよー」と一言気遣い今まで飛び出しエドの口はアノ頃にどんどん戻つていくかのようだつた。

「じゃあ、小さな子供達はこの部品の中から壊れてたり、欠けてる部品を探してもらつ。いいかい？宝探しだ！見つけたヤツには賞金と他にお菓子をあげよう！」

「赤ん坊だつてもうえるつて言つたわよね！？」

生まれたばかりの赤ん坊を差し出され

「やうやく出すともー君は立派なみんなの癒し係だ。でー！君はこのベビーをお守りするのが仕事だ。まあ、「口」が君たちの仕事場だ」とベビールームまでマッチで作つていた。

まあー次は君ーと振り返つたエドの前に恐妻オリビアが立つてゐた。

「オリビア・・・？昨日は・・・」

「これで帰れなかつたのねー本当に素晴らしいわー！」

予想外なオリビアの言葉にエドは夢中で話した。

「やうなんだーコレが大変でね・・・もう時間さえ忘れてしまつて心配したかい？「メンエ」

何もかも心配事はなくなつた。エドは頭の中をフル回転させ次々に必要のない役割も作つてみんなが賃金をもらえるようにした。

工場は活気を取り戻し、昨日までの恨みつらみ事を誰もが忘れたかのように女達は歌を歌いながら、男達は力比べでも競い合いながら、エドが戻りたかった頃の工場以上に理想とする場所になつた。

アンテナは見る見るうちに完成していき、無事に船の到着に間に合うビームか早く来てもらわないと置き場がないほどに作られていつた。

「エド。本当にありがとう。俺が間違つていた。このお通りだ」

「良いんだよカーター。」

全ての事の間違いに気が付いたカーターは心からエドに謝つた。

「じゃあ、おやすみエド」

「あ～また明日カーター」

工場の敷地を出ると見慣れた町並みは相変わらず静まり返つていた。でも、今田もらつた金のおかげだろうか? ところの家から子供達の楽しげな笑い声が聞こえた。

子供の笑い声さえも奪つてしまつた機械化は終わり、たわやかだけど誰もがまた暮していける。

朝までのみんなの暗い顔が、一気に笑顔に変わり誰もが幸せに満ちていた事を思い出し、家の明かりにさえ愛しいと感じるほどエドはやり遂げた達成感と充実感に心が満ち溢れていた。

第2章・2 忘れていた約束

町中の人々は機械化廃止により職ができ、活気を取り戻しつつあった。

隣の町からも次々と働き手がやって来て、その度にエドは新しい職を作ったが、このままで、逆に工場が赤字になってしまふという心配は

「給つたお金でまた店を再開させる事にしたよー。」

「(このお金で)お店を開く事にしたわ!私の夢だつたのよー。」

閉店した町の店が次々に再開し、工場から去つて行く者。そして、その店に雇われていく者。

「子供達は伸び伸びと遊ばせてやらないとねー。」

宝探しに飽き始めた子供達も工場から姿を消し、広っぽで優々と走り回り笑い声が絶えない日々に変わつた。

何もかもが順調で、エドもみんなに祝福されクリスマスには工場長という役をもらつた。

毎日が輝いて、仕事があるという事が、誰もが幸せになるという事が、これほど心まで満ち足りる事だと知りエドは神に感謝した。

「本当に神様ありがと「び」やこます」

いや・・・あれ?神様だっけ?

違つて、金では、このマッチのおかげ。

「ありがとうー・ダニー！」

そう。Iのマッチをダーダーがくれなかつたら。

どうだよタリー。お前は死んでしまったんだよな？
どんなに探したって見つからないお前を今こそ探し・・・？

エドはダーとの約束を思い出し慌てて工場を出た。

工場が再開される日も、ダニーの妻イザベラと息子ジョージを見て
いない！

あれから何日経ってる!? 大変だ!!

町のみんなへの挨拶もせずに、必死に自転車で走り隣のダービーの家に着いた。

「イザベラ！！」

扉を叩こうが誰かがいる様子はない。

「おひむでへ。だいしたの今田せみこのね」

「オリビア！ イザベラはどうしたるー？」

「やう言えば二二数日は見てないけど」

きつと行方不明のダーを探し続け、悲しみと飢えて餓死してるん
じゃないか!? 悪い方向にしか考えられず力ずくで引っ張った凍つ
たドアのぶと共にエドの体は吹き飛んだ。

「ちよっとエドー? 何をしているの?」

オリビアが慌てふためいて死に物狂いで扉にぶつかりまくるエドに駆け寄った時、扉は大きな音を立て家の中に倒れた。

「イザベラー」

誰もいない事を確認するのは1つしかない狭い家だから容易い事だつた。静まり返つた小さな家の中の桶の水は凍り、ダニーとエドが子供の頃と変わらないまま家具も配置されていた。

イザベラに失恋して以来入つた事がなかつたダニーの家。ただ1つ違つたのは、写真立てに飾られたイザベラとダニーの結婚式と愛息子ジョージと2人の写真。

霜が降りて薄ボケて見えたその写真を指でなぞると笑顔のダニーの顔がくつきりと見えた。

「ダニー、めん…俺、約束守れなかつた」

涙が溢れ出し、懺悔と後悔の思いで立つてゐる事が出来なくなつたエドの体は床にひれ伏した。

「みんなの前でカツコ付けて事が進むのがさ、面白くてさーお前がくれたのにな。許してくれ」

家の壁に頭をぶつけ泣きじゃくるエドを正気に戻したのは、オリビアが引っ掛けた桶の冷たい水だった。

「どうするのよー人の家を壊してー！」

ブルブルと震えながら暖炉の前で命を繋ぐエドの単なる勘違いだった。

イザベラとジョージは2つ隣の街から呼ばれて出かけたと言う。

「みんなダニーの死体が上がったんじゃないかって言つてるわ

2つ隣の街といえば、ダニーとオリビアが結婚の記念に旅をした場所だと言つ。

そんな事さえ知らないほど、エドはダニーの事を拒否していく日々を思い出した。

話しかけてくれようが、挨拶すらダニーに判る様に無視し続けてたの。ジョージとは遊ぶなーと愛娘リサにダニーに聞こえるように言った事もあつたのに。イザベラがお菓子を作つて持つてきたのを受け取らずに付き返した事。

いつもいつも悪いと、止めようと想つことは、体と口とは想つようにならず。ダニーを傷つけ欺け続けた。

それにも拘らず「愛する弟」と言つてこのマッチを俺にくれた。

残りの全てのマッチをダニーの愛するイザベラとジョージの為に使おう。

後は俺が好きなよつとて言つてたけど、俺は好き勝手に使わせても

らって工場長の座にも着き、以前より暮らしも豊かになり何も他に思いつく物はない。

2人が帰つてきたら、俺は全てを話してこのマッチをジョージに渡そう。きっとダニーも喜んでくれる。これが、愛する兄ダニーに出来る最大の恩返しだ！

工では燃える炎の温かさに痺れる手でマッチを握り締め、そう心に決めたのだった。

第2章・3 カーター処刑

「なあ・・・アレは何ていう鳥だ?」

「見た事ないけど食べれるのかな」

機械撤廃後初めての春。

雪解けの地面からは数年前から咲く事がなかつた花が咲き

「ありや～渡り鳥つてヤツだな」

煙もチリも消えたおかげで空気まで清潔しく

汚水を垂れ流す事もなくなつた事で魚まで戻ってきた。

当たり前だと思つていた生まれ育つた街の元の風景。

チリと煙が支配した灰色の世界から色彩豊かに戻り

「じつちゃん! あれは何だ! ?」

「あれは蝶だよ」

「じつちゃん! 何かいるぞ! 」

「これは蟻と言つんだよ

子供達は初めて見る昆虫を追いかけ元気に走り回り

女の子達は野原の草花でブーケを作っている。

裕福とは言えないが、街中の人の生活はむしろ豊かになり

「もう一人出来たって！？お前いくつだよ！」

「もう40超えたな」

「パン屋もらしいぜ？アイツ50超えてんだろ？」

新しい家族も増え出しより一層笑い声が絶えない街全体が温かさに
満ち溢れ

工場が吐き散らしたチリと煙の事も忘れ始めた頃に事件は起つた。

「大変だ！工ド！」

勢い良過ぎたのか老朽の為か

工ドの家のドアを壊してルイスが入つて來た。

「何！人の家を壊してんだよ！」

「後で治すよ！それどころじゃないんだ！」

無理やり自転車の後ろに乗せられ

街の集会所までやつて來た工ドは目を疑つた。

「今朝貼られていたんだよ！」

「カーターは？」

「もう連れて行かれたよ！」

「何処にだ！？」

工場が垂れ流していた汚水の為に魚が死に水が汚染された。

煙とチリは空気を汚し木も草も鳥も動物。

さらには人間の体調にまで悪い影響を及ぼした。

これはこの街だけに及ぼした事ではない。

煙は海を越え山を越え。

汚水は海を汚し川を汚し。

はるか遠い異国にまで影響したと思われる。

「カーター！！」

工場の機械化を撤廃し、希望者を全員労働させて賃金を出し

周囲にある街の住人までもが安心して生活できるようになった事は恩恵には当りず。

被告カーターが今まで行ってきた

愚かで自己中心的な考えは決して許せる物ではない。

機械化になった事で解雇された家族が貧しさと飢えに耐え切れず

病になった者。

さらには自ら死を選んだ者。

残された家族までもが死を選ばなければならなかつた。

「これは紛れもない事実」

幼い我子に手をかける母親。

母親に手をかけられた子供。

「お前達は今すぐ償わなければならぬ」

我都市の条例に付き

食料も水も与えられず自ら死を選ぶまで

被告カーターの妻と子供達は島送りの刑。

「被告カーターはこの場で処刑する!」

「カーター!!!!」

カラツとした1発の銃声にカーターはその場に倒れた。

一瞬の事だった。

「ギヤー……！」

縄で縛られながらもカーターに駆け寄りついた妻と子供達が剣で刺し殺されてしまった。

「以上！撤収！」

無残に転がった亡骸をまるで石ころの様に蹴飛ばして仰向けにし持つて行く使者達。

柵沿いに崩れ、その亡骸に向かつて手を合わせ震える街の住人。

この場で処刑されるとは思っていなかったのか。

一瞬の事で母親も間に合はず

声を上げると自分まで殺されると感じて

目を見開き息を殺す子供達。

誰もが目の前で執り行われたこの惨劇に息を殺してゐる。

エドもその一人だった。

「『』苦勞様でした」

柵の中に聞き覚えのある声がした。

この街の町長。

一瞬こじらを見て何処かの国の使者にまた頭を下げる。

「無駄な手間が省けたな」

その声の主達がほおり投げたのはカーターの次男。

大きな布を被されていたけれど次男の腕が垂れている。

「出発ー。」

その手は右左と揺られ

まるでこじらに向かつてバイバイと手を振つてゐるよ。

その手から赤い血が垂れた。

青年に近い年齢だけ

まだ子供だとこいつに

「夏にはサセリと書いて煩い虫が出て来るんだぞ。」

「本当?」

「本当さー。俺が嘘付いた事あるか?」

「あるよ。マリーさんが私が一番だって工ドに騙されたって

「お前にはーって事だ！」

思春期で恋もしてたかもしれない。

今から沢山いろいろな事を経験して夢もあつたかもしれない。
どうしてこんな事に！？

「工ド。 しょうがないんだ」

町長が重い口を開いた。

「工場が他の街まで悪影響を及ぼしていた事は事実」

「だからって！」

処刑を施工した使者が来たのは山を越えた所にある大きな都市。

自分達が住む街とは違いいつも活気に溢れ工ドが手本にしたい憧れるような美しい街。

「生きてる人間は幸せになれたのは事実。 だが」

機械化にならなければ最初から幸せなままだつたはず。

自ら死を選んだのは工場の人間だけじゃない。

魚が取れなくなり生活が出来なくなつた漁師。

農民・牧場経営者・・・

「原因不明の咳で子供を亡くした母親もある」

「そんな事が起っていたのか？」

「ワシ等には償ふられるのだよ」

「償ふってどうやって？死んだヤツは誤まれないぜ？」

「街に死体をさらすんだよ」

「カーター達の亡骸がわざとされてどうなる？」

「見に行こうと思つんじやない。その方が幸せだ」

「人が死んだらお葬式をしてお墓を作るもんだろ？」

「それの何が見ない方が幸せなんだ？」

町長の言葉の意味さえさっぱり検討も付かなかつた。

焼け付くような日差しの中

日傘を差し

上品なマダム達に連れられて

噴水の水しぶきに

びしょ濡れになつて遊ぶ子供達の声が高らかになる前に

陽気な道化師と

軽快な音楽隊に今日もチップを入れ

ビンに詰め込まれた

色とりどりなキャンディーが評判のショップの角を曲がると

ショーウィンドウに飾られた

操り人形のレディーに軽くご挨拶。
マリオネット

焦げる様な厳しい午後の日差しえ喜びに感じるのは

甘酸っぱいダークチェリーパイ。

果実のリキュールに注がれた

スパークリングワインと共に流れ込み
まるで優雅なバレリーナのように
僕の足どりを軽やかにする。

今夜の夕食はトロトン通りにある

ところけるように柔らかい鴨料理が評判の店か
3つ星が輝くあのレストランにするか。

大都市アーカイブの繁華街の雰囲気に夢心地の中

自分が何処の誰であるのかさえも忘れ

町を出て何ヶ月も経っている事に気が付いたのは

「ハドじゃない？」

何度も通っている華やかな通り。

「イザベラ？」

「やつよハドー見間違える所だつたわ！」

大きな袋を抱えた

ダニーを探し突然家を出た彼の妻イザベラとの再会だった。

「何をしてるの?」

「今日の夕食を何処にしようかと」

「誰と来てるの?」

「いや・・・1人」

「1人?」

「1人」

「1人で?」

「ああ。1人で」

「何で?」

「この次は何を聞かれるのか

どう答えて良いのか判らない。」

「もう!久しぶりに会えたのにーもっと喜んでよー。」

「いや・・・喜んでるよ」

「そうだ。一度良かつたわ」

「何?」

「今夜は夕食を一緒にどうづ?」

突然現実に舞い戻り

ヒドの頭の中がパニック状態になつてゐる事に

イザベラが気が付くはずもなく。

「判つたわ!アンテナが、この街にも進出するのね!」

「進出?」

「そりでしょ?スゴイわ~ヒド~」

「そ・・・そ・う・か・い?」

「そりよーーーの街でも噂になつてたのよー!」

撤回する時間も思つく暇も貰えず

イザベラの勝手な妄想話に合ひの手を出しながら

一度も通つた事のない裏路地へ彼女の後ろを着いて行く。

「何回か行つた高級レストランが立ち並ぶ路地の裏だろ?」

勝手口からしき扉の前には見覚えのあるウエイトレス。

チップを渡したから憶えている。

店の中で料理を運ぶ彼女は

上品な女性だつたはずなのに

大股を開いて階段に座り込みタバコをふかす姿は娼婦のよう。

その先の気品高いバリスタもコックと何やら博打じと。

ココにいる誰を見ても、まるで別人のよう。

人間の裏と表。

見てはいけない物を見たような罪悪感さえ感じた。

「ソコで働いてるのよ」

道を挟んで左側にある赤レンガ造りの建物。

「あら。 イザベラが男連れなんて珍しいじゃない?」

「友人よ」

「亭主がいなくなつて溜つてるんじょ?」

「蜘蛛の巣張つた女の穴掃除かい?」

向かい側の建物の段差に腰掛けて

タバコをふかし笑い茶化す3人の女達。

こんな失礼な言葉を吐くなんて。

例え女性だと判つていても許せない。

きつといザベラは心底傷ついたはず。

「こゝは友達として。

男として。

ここ数ヶ月の間に身に付いた

まがい物の紳士として。

断固彼女達に一言言わなければと思つた瞬間

「うわせえんだよー」の色キチガイが！

イザベラの口から出たとは思えない言葉に

思わず呆然とし足が止まつてしまつた。

正気に戻つたエドの視界に写る3人の女達が笑つているのは

きつといザベラの事じゃない。

僕の事を笑つている。

3人の視線と指が物語ついていた。

「エド行くわよ？」

「あつ・・・ああ

「さあ入つて！」

女性から受けた羞恥心。

恥ずかしさから逃れるように

開けられた錆びた小さな扉を自分から閉めると

「暗いから気を」

暗闇の中イザベラの言葉を全部聞き終える前に

何か大きな物に思いつき足をぶつけた。

嫌な気分がさらに滅入る。

そんな気持ちを止めてくれたのは

大きな袋を片手に持ち替え差し出されたイザベラの右手。

「ちょっとエド！大丈夫？」

「大丈夫だよ」

「本当に気をつけてね」

彼女の手を握るのは何年ぶりだろう。

蘇る忘れていた恋心。

イザベラが気が付く前に離すタイミングを伺つけれど

逆に不自然で思い出されるかもしない。

重厚な鉄の扉の中には、さらに大きな扉。

扉を開ける度に一度離される右手。

閉める度に握り戻す右手。

「暗いのは、あそこまでだから」

暗闇に目が慣れたエドに

突き当たりにある扉までが

彼女の手を握れる時間だと知り

久しぶりに感じる何とも言えない気持ちは

「遅いわよー」

幸運にも、中から扉が開けられた事によって

繋いでいられる満たされた時間が延びた。

扉が開けられた途端に聞こえた

大勢の女性の声と

嗅いだ事もない柔らかな麗しいほどの香り。

「何は一体？」

思わず目を閉じて酔いしれるほどが

部屋に入つて、やつと目を開けたのは

イザベラの手が離れ不安を感じたのがきっかけだった。

「『メン…嬉しい事があつて』

「その方は？」

「私の古くからの親友なの…偶然出会つてね…」

「私はヘレンよ。ビーバーロロシクね」

イザベラに紹介されて彼女と握手をしたような気がする。

樽の中に素足を入れ

歌を歌いながら足踏みで洗濯をする女性達。

しわくぢぢやだつた物体が一振りでシャツになつた脱水作業はまるで手品を見ているよ。

色分けされた樽から流される色落ちした排水。

手を繋ぎ踊つてゐるかのように

上空を舞ひ白いカツターシャツの群れ。

サークスのような光景に夢中になるHデ。

「面白いでしょ？」

「ああ。すいへ面白」

「だらうと思つたわ」

「これは洗濯をしてゐるのか？」

「そうよ。洗濯屋。ワンドローよ」

「ワンドロー……」

自分が子供のよつてんを輝かせてゐるせ判つてゐる。

その顔を見て女性達が笑みを浮かべてゐるのも判つてゐる。

大人の男として

普段なら隠し平穏な顔をするのかも知れないけれど。

そんな理屈はどうでも良い。

目の前に広がる光景とシャボンの香り。

「じゃあ、ここで待つでね！」

次の仕事を受け取りに出て行くイザベラを見送る事もなく

衣類と女性達の壮大なパフォーマンスに拍手喝采を贈った。

ランチリーの上は従業員達の家。

働く女性達全員に囲まれ晚御飯を駆走になつた。

「こんな美味しいの食べた事がないよ！」

「ジョージが作ったのよ」

一度だけ行つた事があるレストランの厨房で
ジョージは仕事をしてゐるらしい。

トマトをベースにした彼の作ったスープは絶品だった。

久しぶりに会う故郷の友。

生まれた頃から知つてゐる息子のジョージ。

高級レストランでしか味わえないと思つていた料理。

「エド。ワインはいかが？」

「私はちょっと酔つたみたい」

「勝手に寝なよー。エドは相手になんかしないわよ

イザベラに酷い事を言い放つた3人の女性も

ランドリーの従業員だった。

初対面で呼び捨てされて

最初は良い気分ではなかつたけれど

彼女達の顔に悪気はない。

周囲の女性たちもまたHドと呼び捨てる。

そしてイザベラは笑つてる。

名前何がどうでも良い気分になつて

「Hドってスゴイ男なのねーーー。」

「そうでもないさ」

「やうなのかいーーー？」
「素晴らしい男だつて、アーカイブでも有名よーーー。」

彼女達の高らかな笑い声に合わせて

自分の話も手足が付いて大きくなつていく。

彼女達の会話も歌声も

活気に満ちた工場での働きぶりをそのままに

本当に愉快で楽しい時間。

「アーカイブに来てからとこいつもの

街の雰囲気に酔いしれ

1人で食事をする事も何も不満に感じた事がなかつたけれど

久しぶりに沢山の人たちに囲まれて

人とのふれあいに心が温まる。

「エドもお祭りに行く？」

「エドはお菓子好き？」

女性達の小さな子供達までもが

エドと呼び捨てしてくれるけれど

悪い気は全くしない。

「明日は年に一度のお祭りの日なのよ」

「エドも一緒に行かない？」

「お祭りか」

「エドは、さつと驚くわよ？」

「どうしてだい？」

「見る人全てを虜にする最高のパレードよ。」

見た事がある女性達は待ちきれないのか。

子供達までもが大声でハシャギ踊り始めた。

その横で黙々と一人絵を描く男の子。

「お名前は？」

「名前を聞く時は自分から言つんだよ」

「そうだったね・・・」

5歳ぐらいの子供に常識を言われ

知つてるとも忘れてたとも言えぬ苦い時間は

「僕はセイン。おじさんはエドでしょ」

小さな常識者に先手を越された。

「やあセイン。君のお母さんはどの人なの？」

取り合えず会話を探すギコチナイ大人。

「お皿を洗つてゐる真ん中にこゑるよ」

「やうか。じやあ頃は」

「ママの髪の色は黒いから君はパパに似てるつて言つてたいんでしょ」

最後まで言葉を聞かなくても判る少年。

「まあ・・・」

「その次はお父さんは何処つて聞きたいんでしょ?」

「じゃあ、やうじよつか

「じやあつて、他に聞きたい事あつたの?」

「いや・・・」

「僕のお父さんは居ないよ。居なくなつたの」

「居なくなつた?」

「やう。」といふ子供は皆パパがいないんだよ

「いない?」

淡々と指を刺し家族構成を教えてくれるセイン。

病死・失踪・家出。

「あの子のお父さんは罪人なんだよ」

「罪人！？」

「そう。公開所にね」

「指を刺すんじゃない！」

「ドは思わず

イザベラとジヨージに向けられたセインの口と指を塞いだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2314d/>

天国からの贈り物～不思議なマッチ～

2010年10月10日03時06分発行